宗像

みあれ祭

秋季大祭 斎行

一年に一度、三女神が御揃いになり、御神威新たに斎行される秋季大祭。台風も接近しており天候が心配されたが、辺津宮へ三女神が入御されてからは天候に恵まれ全ての御祭りが滞りなく斎行された。

十月一日 みあれ祭（海上・陸上神幸）

午前八時三十分、降雨のなか大島・中津宮にて出御祭を斎行。沖津宮と中津宮の御神璽を神輿に奉安、心配された雨も出御の時刻には小雨降る中予定通り大島小学校鼓笛隊先導のもと大島港まで陸上神幸が行われ、沖中両宮の神輿を御座船に御載せした。午前九時二十分、大島港を出港。悪天候ながら約二百隻の漁船が二隻

みあれ祭（提供：毎日新聞社）

平成ノ大造営

時満ちて道ひらく

余滴

毎年この季節になると、神社の境内は子供たちの賑やかな声に包まれる。七歳、五歳、三歳の子供たちが晴れ着を着てお参りをする七五三詣で、これまで無事に育ってきたことに対する感謝と今後の守護を祈願する人生儀礼の一つである▼七五三の起源となった祝いは、鎌倉時代の公卿や武家の間での髪置、平安時代の貴族の間での袴着、室町時代の帯結びの三つで、いずれも子供の成長にあわせて身なりを改めるものであった▼江戸時代に入ると庶民の間に広まり、三歳の男女が髪置、五歳の男が袴着、七歳の女が帯び結びを行い、参拝の日が十一月十五日となったのもこの頃である。十一月は収穫を感謝する新嘗祭のある月で、その十五日は旧暦で満月であり、大事な月の満月の日として、この日が選ばれたのである。明治時代に入ると神社への参拝が中心となり、現在のような七五三の祝いが定着した▼安産を祈願して、無事に出産したことを初宮参りで神前に奉告し、さらにその子供を成長させてくれたことを神に感謝するとともに、将来にわたる守護を祈願することが七五三の意義である。また子供のこの年齢は医学的にも発育の節目にあたる。病気にもかかりやすい時期に健やかなる成長を祈るようになったことは、自然な親心のあらわれで、今も昔も変わらない。（神）

の御座船に続いて船団を形成、波高の中、しぶきをあげながら玄界灘を勇壮に神幸した。約一時間をかけ神湊港沖に到着すると、各供奉船が御座船の周りを周回し宗像七浦の各母港へと帰港した。沖中の二隻の御座船は辺津宮の御神璽が待機する神湊港へ入港、一年ぶりに三女神はお揃いになられ神湊港にて駐輦祭が行われた。天候は徐々に回復し予定通り神湊郵便局まで陸上神幸が行われ、それより先は車にて辺津宮第一鳥居まで御座車による神幸を行った。多くの参拝者に迎えられ、葦津宮司が祝詞を奏上し、辺津宮入御祭を斎行した。

悠久の舞奉奏

十月二日　例祭

流鏑馬神事
主基地方風俗舞

二日は朝から晴天となり、八時より神門前にて流鏑馬神事の奉納があり地上約八メートルの的に騎手が矢を射ると参拝者から拍手が沸き上がっていた。十一時からの例祭では福岡県神社庁宗像支部の献幣使、宮地嶽神社献幣使、氏子奉幣使にも参向頂き斎行。主基地方風俗舞が奉奏された。

十月三日　総社祭

翁舞・浦安舞

十一時より総社祭斎行。喜多流による翁舞が奉奏された後、地元の中学校の女子生徒四名による浦安舞が奉奏された。祭典終了後、奉仕神職は高宮、第二宮、第三宮、宗像護国神社に分れ秋の御祭りを斎行した。十四時からは南坊流・二代目洗心庵・瀧口宗芳氏以下同社中による献茶祭が斎行され、見事な御点前が披露された。

「高宮神奈備祭」悠久舞奉奏

午後六時、秋季大祭の

氏子奉幣使　金橋邦勝氏

主なる奉仕者御芳名（敬称略・祭典の順）

宗像大社氏子会
◎海上神幸奉仕
海洋神事奉賛会（会長・中村忠彦）
◆沖津宮御座船　大安丸
（鐘　崎）船長　大庭　和成
◆中津宮御座船　第二大福丸
（大　島）船長　古賀　健二
◆沖津宮先導船　第三曙丸
（神　湊）船長　吉武　義成
◆中津宮先導船　新栄丸
（津屋崎）船長　井ノ上靖基
◆花火船　生漁丸
（大　島）船長　上野　美実
◆報道船　みたけ
（大　島）船長　遠藤　英樹
◎陸上神幸奉仕
◆御座車
西久大運輸倉庫株式会社
株式会社　新出光
宗像地区タクシー協会
宗像観光協会
◆先導車
宗像観光協会
宗像地区交通安全協会
宗像市消防団第十一分団
◆供奉車
宗像市消防団第十二分団
玄海ホテル旅館組合
◆大島鼓笛隊奉仕
大島小学校児童
◆御長手棒持・提灯行列
玄海小・中学校生
◆陸上神幸実行委員会
玄海地区コミュニティ運営協議会、津加計志神社総代、宗像・沖ノ島世界遺産市民の会、玄海地区交通安全協会、神湊盆踊り保存会、宗像市消防団、宗像市、宗像大社氏子青年会
◎主基地方風俗舞
〈舞方〉松井　実、松井徳一郎
深田　鷹之、深田　誠
〈歌方〉中野　正徳、中野　久志
吉田　光利、清水　陽介
森　勝紀
◎流鏑馬神事
世話係　坂口　好之
奉仕者　柴垣　裕司、蒋田　浩一
河野　暁
◎氏子奉幣使
金橋　邦勝（宗像市）
◎翁舞
喜多流　狩野了一氏以下同門下中
◎浦安舞
谷川　凛、森　美由紀
吉積　麻衣、中野いづみ
◎献茶祭
南坊流・二代目洗心庵・
瀧口宗芳　同社中
◎高宮神奈備祭奉仕
宗像大社氏子青年会

無事の斎行を感謝し、更なる神威の無窮を祈念する高宮神奈備祭を高宮祭場にて斎行。一年を掛けて温習した当大社巫女が、大祭を締め括るに相応しく見事に悠久の舞を奉奏すると、浄闇の祭場に集まった参列者達は感動の様子で三日間に亘る秋季大祭が盛大に幕を閉じた。ここに秋季大祭に御奉仕頂いた皆様方に書面を以って厚く御礼申し上げます。

市内中学生による浦安舞

翁舞 奉仕：狩野了一氏

浦安舞を終えた市内中学生

流鏑馬神事

主基地方風俗舞奉奏

福岡県氏子青年協議会
神宮新穀献供米稲刈り神事

十月十日、宗像大社神田にて福岡県氏子青年協議会神宮新穀献供米事業稲刈り神事が斎行され、当大社氏子青年会々員六名をはじめ県内各神社氏子青年会々員と子供たち総勢三十四名が参加した。

当日十一時三十分、神田脇にて神職が稲と参列者を御祓いした後、鎌を手に参加者全員で神田に進み、稲刈りを開始。毎年参加されている方も多く、慣れた手付きで進み、神事は無事終了した。

この神事は毎年各神社持ち回りで伊勢神宮に初穂（新穀米）を奉献すべく行われている。

沖・中両宮秋季大祭

～爽やかな秋晴れのもと斎行～

十月十四日・十五日の両日、筑前大島に於いて沖津宮・中津宮の秋季大祭が厳粛且つ盛大に斎行された。

この大祭は旧暦の九月十五日に斎行され、漁村である大島は漁止めとなり島全体を挙げての大祭となる。又、神賑行事として島内の各地区団体より演芸奉納もあり、毎年盛大に斎行されている。

十四日、早朝より沖・中両宮奉賛会、同翼賛会、同敬神婦人部のご奉仕により社殿や境内の装飾、又中津宮本殿東側には秋季奉納演芸大会の舞台が設置された。午後五時、沖津宮遙拝所、中津宮に於いて宵宮祭が斎行され、あくる日の大祭の無事斎行を祈念した。

翌十五日、好天のなか沖津宮遙拝所にて沖津宮秋季大祭、大島の最高峰御嶽山に鎮座する御嶽神社にて秋祭、宮崎地区で厳島神社祭が斎行され、神職が各斎場其々滞りなく執り行われた。

午前十一時、地元島民を始め遠近の篤信者多数参列のもと、中津宮秋季大祭が斎行。宮司が国家・皇室の弥栄を祈念する祝詞を奏上し、次いで島民を代表して、奉幣使の里口健氏が奉幣詞を奏上した。続いて巫女が神楽「浦安の舞」を奉奏し、次に宮司・奉幣使・参列者が各々玉串拝礼を行い、祭典は厳粛裡に斎行された。

午後一時三十分、秋空の下恒例の「奉納演芸大会」が開催。子供達による太鼓やダンス、各地区からは舞踊・カラオケ等が披露され、秋澄む境内は神人和楽の笑いと歓喜の声に包まれた。

大祭準備に連日御奉仕頂きました沖・中両宮奉賛会（会長＝沖西敏明氏）、同翼賛会（会長＝遠藤三保氏）、同敬神婦人部（部長＝河辺恒子氏）を始め、ご協力頂きました島内氏子の皆様に、心より御礼申し上げます。

浦安舞奉奏

氏子奉幣使　里口健氏

七五三詣のご案内

宗像大神様に生を受けてから今日まで無事に成長出来たことを感謝し将来のご加護を祈願する人生儀礼です。

◆年　齢　3歳の男女児、5歳の男児、7歳の女児
◆期　間　11月末迄
◆初穂料　1人　5,000円
◆授与品
御守、御幣、千歳飴　ほか

第46回 西日本菊花大会のご案内

毎年、11月1日から開催される菊花展。九州各県、山口の菊花愛好家から出品された様々な菊の花約3000鉢が境内に展示され、西日本一の規模を誇ります。

◆会　期
平成28年11月1日(火)～22日(火)
◆時　間　終　日
◆会　場　宗像大社境内
◆拝観料　無　料

表千家 献茶祭斎行

十月十七日、恒例の表千家献茶祭を斎行。福岡県下は勿論の事、西日本一円の茶道に勤しむ和装の同門会始め関係者六百名余が当大社に参集した。

献茶とは神々や仏に茶を御供する儀式であり、全国各地で神前に茶を供える献茶祭・献茶式が催されている。当大社での表千家家元による献茶は、昭和三十七年、宗像大社復興期成会々長で出光興産創業者である出光佐三翁の御尽力より始まり、以降毎年出光家により奉納されている。また、表千家は御存知の通り初祖・千利休が茶の湯の理想とした「わび茶」を伝え、その道統は現在十四代而妙斎千宗左宗匠に受け継がれている。本年の献茶祭では千宗員若宗匠が奉仕をされた。

神前にて献茶の儀

当日は、定刻の午前十一時、一鼓を合図に奉仕神職、千宗員若宗匠以下関係者、出光興産株式会社関係者、同門会は、祓舎にて修祓の後本殿へ参進、それぞれ所定の座に着床し、祭典が斎行された。

斎主の祝詞奏上に続き、千宗員（せんのそういん）若宗匠による献茶の儀が執り行われた。拝殿に設けられた風炉前に端坐、切柄杓の手許、袱紗さばきも鮮やかに御点前を大勢の参列者は真剣な眼差しで見詰めていた。

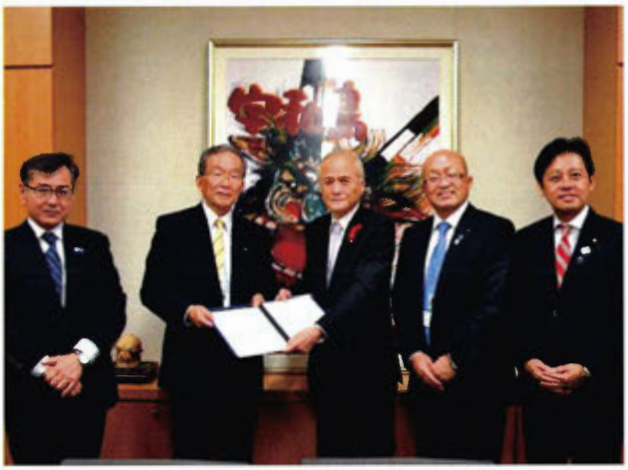
暫しの後、点てられた濃茶・薄茶の二服が雅楽の調べが流れる中、神職の手により御神前に奉献された。献茶の儀の後、斎主、若宗匠、出光興産株式会社名誉会長 出光昭介氏、同門会福岡県支部事務長鈴木益一郎氏が玉串を奉奠して約一時間の祭典は滞り無く終了した。

献茶祭終了後、参列者は副席が催される儀式殿の「出光席」、斎館の「同門会席」へ参席し、茶席に掲げられた掛軸や茶道具の名品を鑑賞しながら、至福の一時を楽しんだ。

第3回 宗像国際環境一〇〇人会議「宗像宣言」を環境省・ユネスコへ提出

十月五日、宗像国際環境一〇〇人会議の「宗像の森里川海から世界へ2016宗像宣言」（先月号全文掲載）を谷井博美宗像市長、小林正勝氏、当社宮司等で環境省へ出向き、山本公一環境大臣、関芳弘環境副大臣へ提出。またあわせて日本ユネスコ協会へも提出し海外へは日本ユネスコより本部へ届けて頂けるようになった。

また、宗像で行っている取り組みについても報告をし、環境省への陳情を終えた。



沖ノ島出土神宝を一挙公開
「宗像・沖ノ島大国宝展」好評開催中

宗像大社では、特別展「宗像・沖ノ島大国宝展」を開催している。世界遺産推薦候補「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の価値を再認識してもらうことを目的とした本展では、約八万点の国宝沖ノ島神宝の中から選りすぐった貴重な品々一万六千三百点を、神宝館の一階～三階全フロアーで一堂に展示しており、これまでにない圧倒的な規模となっている。

会場に入り最初に目を奪うは、巨大なケース一面に整然と堂々と並ぶ鏡の展示だろう。通常は八面程度の展示だが今回は四十五面と膨大な数である。多彩な鏡の集合展示も神々しい。本邦初公開として、獣帯文方格規矩四神鏡（伝沖ノ島出土品）と、鈕（中央の丸い突起）とその周辺の破片（十八号遺跡出土）を初めて接合した形で十八号遺跡出土の鏡として公開している。これらは、当大社と奈良県立橿原考古学研究所の鏡の共同調査の際に接合が確認され1個体であることが判明したものである。

二階では、沖ノ島神宝の主要な品である煌びやかな金銅製龍頭と金銅製高機が、中央の広い空間に静かに浮かびあがるかのごとく展示されている。普段ほとんど公開していない色鮮やかな瑪瑙玉と真珠玉、これまでで最多の展示数となる金銅製歩揺付雲珠二十五点も必見である。

三階展示室では、ついに沖ノ島神宝を代表する金製指輪が登場する。千五百年前の黄金の輝きを目にすれば、誰もが沖ノ島の神秘や神宝の荘厳さに魅了されるだろう。

展示の最後を飾る奈良三彩小壺のたおやかなフォルム、美しい色彩も見逃せない。

さらに、今回、画期的な試みとして、神宝館館内ならびに境内（屋外）に国内外で活躍中の写真家増浦行仁氏の写真を展示し、辺津宮境内全体を美術作品として表現している。見どころは満載、みなさまの興味のままに自由にお楽しみいただけるだろう。

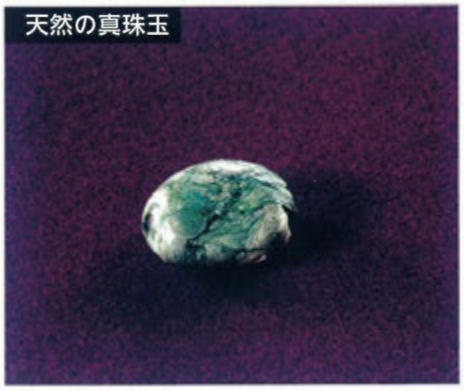
本展覧会で、沖ノ島で執り行われた大和朝廷の国家祭祀の意義や、国宝の神宝それぞれがもつ本来の美と趣にせまり、古代の人々の敬虔な祈りに思いをはせていただければ幸いである。

鏡集合展示

古代の沖ノ島祭祀では71面もの鏡が捧げられた。
古代、大和朝廷が沖ノ島で直々に祭祀を行ったことを物語る。

雲珠の集合

馬の腰の部分を飾る金銅製歩揺付雲珠。


天然の真珠玉

龍頭と高機の展示写真

秋の奉納

舞踊家 浅野瑞穂氏「瑞穂舞」奉納

十月二日、辺津宮本殿にて舞踊家浅野瑞穂氏ほか生徒三十名によって舞が奉納された。昨年は中津宮、沖津宮遥拝所でも舞を奉納されている。

浅野氏は、神楽を始めとする日本の伝統舞踊に加え、中国古典・民族舞踊を学び、流麗で大きくゆったりとした動きの「瑞穂舞」を創始された。その優雅で繊細な表現は高く評価され海外公演を含む数々の舞台公演を行われている。脚本家故・市川森一氏によってシナリオ化されたドラマテック古事記（出演真矢ミキ氏）にも出演されている。

奉納終了後には、宗像市長谷井博美氏が浅野氏を「むなかた応援大使」に任命した。

ウォーキングドクター デューク更家氏 奉納ウォーキング

十月三日、デューク更家氏によって中津宮・辺津宮へウォーキングが奉納された。氏は、気功や運動生理学、武道、ヨガ等を学び独自のウォーキングエクササイズを確立され、現在はモナコにも拠点を構えヨーロッパを中心に世界中で活躍されている。

辺津宮の奉納では、軽妙なデューク氏の喋りに誘われ多くの参拝者が奉納ウォーキングに参加していた。

バイオリン奏者 朝来 桂一 氏 奉納演奏

十月十五日正午より辺津宮本殿にてバイオリン奏者 朝来桂一氏による奉納演奏が行われた。

氏は、東京芸術大学音楽学部器楽科バイオリン専攻を卒業され、これまでに米国アスペン音楽祭・別府アルゲリッチ音楽祭・ゴールドベルク記念音楽祭・指揮者大友直人・アランギルバート氏による『mmcj』をはじめとする国内外の音楽祭に出演されている。2015年全国ロードショー 映画「マエストロ！」（出演：西田敏行、松坂桃李）にもバイオリン奏者として劇場出演されている。

当日、演奏された曲は、「タイスの瞑想曲」で参集した二百名に上る聴衆はその音色に聴き入っていた。

第六六三回 宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日〆切

北九州市　八幡西区　豊田　光子

人生は歩む影とや旅に出て身辺整理す行先何処

評　最近、終活が話題になるが、作者は終活を心の旅だと感じているようだ。何処と詠んでいるが、どこにも行かなくても旅なのだろう。

福津市　星ヶ丘　佐々木和彦

みんなみに開ける高処のわが住まい時に潮の白々と寄る

評　海の見える高台に住む作者、海を身近に感じているような風景描写が気持ち良い。

宗像市　自由ヶ丘　萩原　勉

ホース持つ右手の甲を蚊は刺しぬ燻らす線香嘲笑うかに

評　秋の蚊はしつこい。蚊取線香も作者を守ってくれないらしい。結句は抑えて〈気にせぬごとく〉くらいで。

宗像市　多　禮　早川　祥三

結界の箱に桃の実ふくよかな産毛のままの色香ただよう

評　お供えの桃を、色香と詠んだ作者はお寺には官能的すぎて相応しくないと思ったのか。しかしここでは〈～で香りを放つ〉くらいに。

福津市　若木台　山﨑　公俊

海近き村の花壇に名札ありマリンゴールドと赤く大きく

評　花壇の札に注目した作者。マリーゴールドなら普通の花の名だが、海に近い村だからかマリンゴールド？発見が面白い。

北九州市　門司区　北野カズミ

さみどりの風船かづら茶に染まりカサコソ揺れる白南風のなか

評　季節の移り変わりを捉えた歌。白南風は九州では八月、風船かづらも種をつくる頃だ。三句染まりは〈なりて〉ではいかが。

宗像市　日の里　大和美由紀

一雨でにょきにょきと茎立ちて庭のあちこち彼岸花咲く

評　彼岸花の蕾と茎の現れ方が目に見えるようだ。以前咲いた場所を覚えていないと驚く。

宮若市　宮　田　本田エリナ

オレンジの朝日蛇口に反射して九月の朝はゆるりと進む

評　感覚的な歌。日の出が遅くなり、朝の時間がなかなか進まないと感じる作者か。朝日の色から考えると割に早い時間だろう。

宗像市　日の里　秋吉　嘉範

車椅子パラリンピックラグビーで相手を倒す激突試合

評　残念ながら見なかったが、車椅子を倒し合うほどの迫力ある試合展開だったのだろう。三句の助詞〈で〉を〈は〉にして。

宮若市　水　原　吉崎美沙子

修験者の走りたるとう尾根の碑の苔の中なる文字拾い読む

評　碑の文字の丁寧な描写が良い。書かれた文も知りたい、それでもう一首詠まれては。

◆選者詠

重ね着をする日のつづく秋の朝
木々きはやかに稜線に立つ
いろ淡く花の絵を描く喪中はがき
日々にとどけり秋深まりて

第六三六回 俳句作品集

宗像市　多　禮　早川　祥三

腰伸ばす青田の風の母おくる

11月祭事暦

1日 月次祭
午前10時～
高宮祭、第二宮・第三宮祭
宗像護国神社　月命日祭
午前11時～　総社祭、浦安舞奉奏

3日 明治祭 午前10時～

15日 月次祭 併 七五三祭
午前10時～
総社祭・高宮祭、第二宮・第三宮祭

23日 新嘗祭 午前11時～ 豊栄舞奉奏

編集後記

心を進める▼表千家若宗匠の御奉仕による献茶祭が行われ、参列者等はその作法一つ一つに魅了された▼その作法と同じく、神職にも祭式作法というものがあり神前にて非礼、不敬がないように作法が成立している。それを厳修することにより、作法に込められた心に触れることができるのではないだろうか・・・▼若宗匠の神前における作法を目の前で見て、もっと作法を磨きあげ、一意専心で日々奉仕をしていかねば・・・と決意した献茶祭でした。（黒）

心は形を求め、形は

発行所
宗像大社社務所・宗像会
住　所 〒八一一―三五〇五
福岡県宗像市田島二三三一
電　話（〇九四〇）六二―一三一一（代）
発行人 葦津 幹之
編集人 大塚・鈴木・黒神
制作・印刷 ゼネラルアサヒ